
仮面ライダー 過去とメモリとカード

20th Century

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダー 過去とメモリとカード

【Nコード】

N8558W

【作者名】

20th Century

【あらすじ】

さわやかな風が吹く町―風都。

そこで探偵業を営んでいる男、左翔太郎は相棒のフィリップ、刑事の照井竜とともに不可解な事件に巻きこまれていく。

一方、役目も終えカードを使い果たした桜井侑斗はゼロライナーで自分の時間へ帰っていた。もとの生活に戻るはずだった。

さらに、海東大樹は盗もうとしたお宝に自分のカードを盗まれてしまう……。

この三つのライダー（+α）が混ざるとどうなるのか気になったので作っちゃいました

プロローグ（前書き）

短編小説と連載小説を見事に間違えたので同じ名前の長編小説になっ
ています。

申し訳ございません・・・。

私はおっちょこちよいなのでこっとう間違いをよくしてしまうん
です・・・。

以後気をつけます。

以下の文章は間違えたのと同じ文章になっております。
なので、すっ飛ばしていただいて構いません。

初めて小説を書いてみました。

更新は遅くなると思うのですが、しぶとく待っていただけたら嬉
しいです

何年も前の仮面ライダーじゃん！！とかつつこみつつも読んでい
ただけたら・・・と思います。

電王はTVシリーズが終わり、『仮面ライダー×仮面ライダー×
仮面ライダー THE MOVIE 超・電王トリロジー EPI
SODE RED ゼロのスタートウィンクル』の前までの間、デ
イケイドとWはTVシリーズと映画、両方が終わったあとなので、
照井君達が結婚していたり、海東大樹が光写真館にいたりします。

では、つたない文章ですが・・・。

物語の始まりです♪

ブローグ

ブローグ 空からふってきたもの

照井竜は困り果てていた。

いくつもの不思議なガイメモリの力を見てきたが、こんなのはじめてだった。

「なんでこんなことに・・・」

思わず呟いてしまった。

しかし呟かずにはいられなかった。

なぜなら・・・

電車が空からふってきたからだった。

黒色の電車―否、黒色かさえも怪しいそれは、照井と亜樹子の目の前にふってきたのだった。

「すぐくバラバラになってるね・・・」

電話を終えた亜樹子は照井に話しかける。

一体何処の誰に電話していたのやら・・・。

照井は電車に近づく。

「あつ、竜くん！？危ないよー！」

「・・・」

照井は電車を調べる。もし中に人がいたら助けなくてはならない。
「・・・誰もいないのか？」

一人呟きつつ後ろにまわる。すると、瓦礫の下敷きになって人が倒れていた。

その人をなんだか人間ではない者が引つ張り出そうとしている。

「?・・・まさか、ドーパント?!」

照井はアクセルドライバーを取りだし変身した。

「おい、ドーパント！何をしている！」

その声に気付き、驚いたドーパントもどきは慌てだした。

照井はドーパントもどきに蹴りを食らわせた。

「あゝ」

なんだか間が抜けた声を出しながら、ドーパントもどきは少し離れたところへ飛んでいった。

「おい、大丈夫か？」

照井は男に話しかける。

しかし、返事はない。

「・・・いたた」

ドーパントもどきはゆっくりと起きあがる。

照井は、男を亜樹子に任せてドーパントに向き直った。

「次だけりをつけてやる」

“アクセル マキシマムドライブ”

ガイアメモリの音があたりに響き渡る。

照井はドーパントもどきに飛びかかるうとした。

「・・・まで、あいつは、ドーパントじゃ・・・ない・・・」

「!？」

照井は声のした方を見る。

「あいつは、デネブ・・・。俺の、契約者だ・・・。」

プロローグ（後書き）

プロローグって言うておいてなんだけど、長くなってしまった・・・。

次は・・・もう少し上手に書きたいなあ（T―T）

繰り返しになってしまいましたが、短編と連載の欄をろくに気にもせず投稿してしまいました。

申し訳ございません。

以後気をつけます・・・。

第一章 1・なくなったり穴があいたり（前書き）

今日はいい天気です♪

下手ですが読んでいただけると嬉しいです。

不定期の更新になってしまいますが最後までよろしく願います

第一章 1．なくなったり穴があいたり

「ないないないないー!!」

男が捜し物をしている。

「一体どうしたんだい？翔太郎」

フィリップが声をかける。

「見つからない・・・ここにちゃんとしたはずなのに」
フィリップを無視して、翔太郎はぶつぶつ言っている。

「・・・」

フィリップは翔太郎の焦りように何も言えない。

それほど大事なものは、一体・・・

「おお、フィリップ」

「なっ、なんだい？」

突然声をかけられたので、びっくりしてしまった。

もっとも、翔太郎は気付いてないようだが。

「お前、知らないか？」

「？」

「一年前にお前が俺にくれた『ロストドライバー』。

昨日引き出しにしまって寝たはずなのに、ないんだよ」

「君は、さっきまで出掛けていただろう？その時は持つて行かなかったのかい」

「ああ、あの時は持つていくのを忘れたんだ。まあ、いざとなればお前がいるからいいと思って・・・」

僕を頼ってくれていたのは嬉しい。しかしこれは問題だ。

何者かに悪用でもされたら・・・

「本当にそこにしまったのかい？」

「ああ。それは確かだ。間違いない」

翔太郎は溜め息をついた。

ファンゲメモリじゃあるまいし、どこへいったのやら・・・

ーピンポーン

「？」

玄関のベルが鳴った。

「こんな時に依頼か……。ついてないなあ」

翔太郎はぼやいた。

亜樹子がいたら間違はなくスリッパでたたかれている。

フリッブはドアを開けた。

「あれ？亜樹ちゃん」

依頼人ではなく亜樹子だった。

「あつ、開けてくれてありがとうフィリップ君」

「なんだ、亜樹子かよ」

「何だとは何よ翔太郎君」

いつの間にかスリッパを構えている。

「亜樹ちゃん、一体どうしたんだい？その荷物は……。」

亜樹子の周りには、大きいものから小さいものまで沢山のものが置いてある。

「なんだか分かんないんだけど、竜君にここに届けろって言われたから持ってきたの。」

「……ほら翔太郎君、運ぶの手伝って！これ重たいんだから！」

「はいはい……」

翔太郎は外していた引き出しをしまってドアのほうへ近づいた、が。

「あー！！」

亜樹子が叫んだ。

「？」

フィリップは後ろを振り返る。

翔太郎の姿がない。

「……」

亜樹子と二人で部屋の真ん中へ行く。

部屋の真ん中には大きな穴があいていた。

「誰がこれの修理代出すのよ・・・」
と、亜樹子がぼやいた。

第一章 1・なくなったり穴があいたり（後書き）

あの事務所は古いそうですから・・・。

翔太郎君、怪我してないといいなあ・・・。

文、下手だなあ、私・・・。

第一章 2・疑惑ばかり渦を巻く（前書き）

今回は長いです♪

でも間が開いてしまったので、まあいいか♪

と自分で納得しております。

第一章 2・疑惑ばかり渦を巻く

光夏美とユウスケは二人で考えていた。

「この世界は一体何の世界なんでしょうか」

「うーん。まったく分かんないね」

「大体土君、『旅を続けることが俺の世界だ』なんて言ってたのに、次の日に熱を出して倒れ込んでしまっんですよ。まったく・・・」
文句を言いつつも目の前の絵を眺める。

そこにはなんだか立派な塔みたいなものがかかっていた。

「これは一体なんだろうね？ なんだか大きそうだけど」

「ええ。いったい何なんでしょう？」

「それは、『風都タワー』だ。」

背後から声がかかる。振りむくと部屋の入り口に男が立っていた。

「土君！ もう大丈夫なんですか？」

「ああ、心配ない。ところで海東は？」

「海東？」

夏美とユウスケは顔を見合わせる。

「・・・知らないんだな」

「新しい絵を見た途端にどこかへ行ってしまった・・・」

土は溜め息をついた。

「まあ、あいつらしいか・・・」

土は部屋の中へはいり、絵のところへ近づこうとした――が。

「!？」

突然ものすごい音がして、あたりは煙に満ちた。

「えっ？ なに？」

台所で朝ご飯を作っていた夏美のおじいさんも出てくる。

「土君？」

「土!・・・あれ？」

煙が収まり視界が開けた三人が見たのは、瓦礫と人と、それに押

しつぷされている土だった。

「・・・痛い・・・」

土は呟いた。

「翔太郎君！大丈夫？」

穴から二人の人間が顔をのぞかせている。

「・・・ああ。大丈夫だ・・・」

翔太郎、とよばれた人物はそう言って腰をさすっていたが、やがてすわったまま服装を整えだした。

「おや、お客さんが三人だね」

おじいさんは呑気にそんなことを言っている。

夏美がおそろおそろ声をかける。

「あつ、あの・・・。あなたは・・・？」

「あつ、はじめまして。ハードボイルド探偵の左翔太郎です」

「ハーボイルドだけだね」

上から茶々を入れられた。

「うるせえ亜樹子！黙ってる！！」

「あつ、竜君から電話だ」

翔太郎の話をまるで聞いてない。

夏美とユウスケ、そして土はなんだか忘れられている気がした。

「・・・というか、いい加減俺の上からどけよ！！」

「うわっ！下に人が」

翔太郎は慌ててどく。

土は立ち上がりつつ言った。

「お前絶対知ってて座ってただろ」

「いや？・・・というか、お前はディケイド！！」

「！彼が、ディケイド・・・」

フィリップが呟く。フィリップは変身後の彼なら見たことはあるが、変身する前の姿は後ろ姿しか見たことがなかったのだ。

「今頃気付いたのかよ」

土は毒づく。

「というか、ここはビリヤードだったはずだ。何であんた達がいるんだ？」

「今は写真館です。はい珈琲。よかったら飲んでってください」
おじいさんは手に珈琲の乗ったお盆を持っている。

「あつ、どうも・・・」

翔太郎は一つ受け取った。

「上まで持っていないと・・・」

そう言っておじいさんは出ていった。

「『世界の破壊者』がこの世界に何の用だい？」

「！フィリップ！」

「でも、翔太郎。これははっきりさせておくべきだ。

もしかしたら、ここ最近おこっている変なことも彼のせいかもしれないよ」

「ここ最近？変なこと？」

ユウスケが会話にはいつてくる。

「ああ。ここ二三週間、町の人たちが無差別にドーパントに襲われててな・・・。昨日もそれを調べに行ってたんだが・・・」

「そこに現れたのは僕たちが倒したはずのドーパントだったのさ。

検索したところ、君は仮面ライダーを召喚出来るじゃないか。

だから、もしかしたら君が何か関わってるんじゃないかと思ってね」

「・・・」

士たちは顔を見合わせた。

「ちょっと待った」

と三人は同時に翔太郎達に言って話しだした。

「俺、今言ってたやつに一人心当たりがあるんだが・・・」

「私もです」

「俺も」

士は溜め息をつく。

「海東め。ついに犯罪に手をだすとは・・・」

「泥棒も犯罪です」

夏美につっこまれた。

「翔太郎。どうやら彼らは何か知っているようだよ」

「ああ」

「ちよつとフィリップ君」

「？」

フィリップは亜樹子に声をかけられた。

三人の話し合いはまだ続く。

「海東のこと、言ったほうが良いんじゃないのか？士」

「そうですよ。探偵なんですし」

「でも、半熟・・・ははははは」

夏美に笑いのつばを押された。

「おい！何でおすんだよ！夏みかん！！」

「会って間もない他人の悪口を言わないでください！それに私は夏みかんじゃありません！！」

「？なつみかん？」

翔太郎が呟いた。

「あつ、いや、こつちの話・・・。というか、二人とも真面目にやつてよ」

ユウスケは二人を諷めた。

「翔太郎、僕はちよつと出掛けてくる」

急にフィリップが言った。

「例の彼が目を覚ましたと照井竜から電話があつた。

彼らから何かしら聞き出せたら、君も来てくれ。

僕は先に行く」

「ああ。わかつた」

翔太郎は目の前で何やらこそこそしている三人を見る。

なんだかややこしいことになりそうな、そんな気がした。

「それにしても・・・」

なんだか目の前で兄弟げんかを見ている親のような気持ちでした。

第一章 2・疑惑ばかり渦を巻く（後書き）

あの場で大人だったのは翔太郎君一人かも・・・。

いや、そんなことはないか。

感想、苦情、その他何でもお待ちしております♪

第一章 3・奇襲（前書き）

今日は久しぶりに時間が空いた〜！！

・・・早く寝よう。

第一章 3・奇襲

「なるほど。海東大樹、そいつか……。すまない。人違いをしていたようだ」

「ディケイドとディエンドは名前が似ていますしね」

翔太郎達は、椅子に腰掛けていた。あたりには瓦礫が散乱したままである。

「あいつと俺と一緒にするな！それと、お前がなくした何とかってやつも海東が持つてるかもな」

「『ロストドライバー』な。」

すかさず翔太郎がつっこむ。

「じゃあ、そろそろ俺は失礼するぜ。色々忙しいんでな。」

「またいらしてください」

夏美が写真館の入り口まで翔太郎をみおくる。

「・・・あつ」

「？」

「天井直しとけてディケイド・・・じゃないや、門矢に言つてくれ」

「えっ？！ちよつと、それは・・・」

夏美が文句を言おうとしたが、既に翔太郎はバイクに乗って去ってしまっていた。

「本当に海東さんが関係しているのでしょうか・・・」

「？」

ユウスケは首をかしげる。

「だって海東さんが『ディエンドドライバー』で怪物を召喚したところなんて、私、見たことないですし・・・」

「俺は“K A I J I N R I D E”で敵を召喚したのを見たことがあるよ。たしか、シンケンジャーの世界だったような・・・」

「でも、それは海東じゃない」
士が割ってはいいる。

「なんにしろ、調べれば分かることだ。俺たちも海東を探そう。
あいつの濡れ衣をはらせば、あいつに恩を売りつけることが出来るからな。」

それに、敵になったらなっただであいつを倒す口実が出来る！」
不敵に笑う士。

その様子を見て夏美はユウスケに囁く。

「今日の士君、何かいつもより海東さんを敵視していませんか・・・？」

「・・・俺もそう思う」

「さあ、行くぞ！夏みかん！ユウスケ！」

士は勢いよく部屋を飛びだしていった。

「待ってください！士君！」

二人は慌てて士を追いかけようとした、が。

「うわあ！！」

士が勢いよく飛び込んできた。

「えっ？ちよっ、士！」

夏美達は慌てて駆け寄る。

「大丈夫ですか？一体どうしたんですか？」

「もしかして、転んだ？」

「士君はドジですからね」

「・・・お前ら俺を馬鹿にしすぎだ」

士は立ち上がりながら言う。

「見る。お客さんだ。あまりマナーがいい客のようではないがな」
そう言いつつ『ディケイドライバー』とどこからか取りだそうとした――が。

「？」

夏美は不思議に思った。

目の前にはイマジンやグロンギやら、いろんな世界の怪物がいるのに、いつもは率先して変身して戦うはずの彼が、変身することもなくただ立っている。

「土君、何で変身しないんですか？」

「・・・」

「？」

二人は顔を見合わせる。土は目の前に突然現れた男をにらんでいた。

「・・・海東」

彼は男の名前を言った―ドスのきいた声で。

「？海東さん？」

夏美とユウスケは土の前にいる人物を見る。

土の前には長身で細身の男―海東大樹が立っていた。海東はいつもの笑みを浮かべている。

「やあ、土。・・・どうしたんだい？そんな怖い顔をして」

「俺のバツクル盗んだだろ」

「何のことだい？」

とかいいつつ、片手に持っているそれは土のものだった。

「お前・・・！それは俺のものだ、返せ！」

それと、こいつらはカードの力で召喚したのか？」

海東は笑みを深くした。

「そんなヤワなものでないことは、分かってるくせに」

「じゃあ、本物？」

ユウスケが呟く。

「そうさ。こいつらは正真正銘本物」

「どうして本物の怪物と海東さんが一緒にいるんですか？」

「・・・それを君たち話す気はないね」

「どうして？私達、仲間じゃないですか！」

「どうかな？」

「！そんな・・・」

「どうせ宝のためなんだろ」

「さあね。じゃあね、土」

殴りかかってきた土を軽々とよけて、海東は写真館から去っていった。

「待て、海東！！」

世界の破壊者

門矢土は敵のことも忘れて勢いよく飛びだしていった。

あたりには沈黙が漂う。

「土がこの世界を破壊しそうな気がする」

「・・・私も今回ばかりはそんな気がします」

「とりあえず、ここは俺に任せて！夏美ちゃんは土の所へ行つて！！」

「分かりました」

夏美は写真館の入り口まで行き、振り返っていった。

「あつ、忘れてた。ユウスケ！」

「何？夏美ちゃん」

「天井、直しといてください！」

夏美は飛びだしていった。

「・・・そんなあ」

ユウスケは、うなだれた。

土は見当たらなない。

「土君はまだ近くにいますでしょうか・・・」

というか、この町は広そうですから見つけるのには苦労しそうです・・・」

しかし、写真館以外の所から大きな音がした。

「・・・案外早く見つかるかもしれません」
夏美は音のした方へ走りだした。

第一章 3・奇襲（後書き）

ぐだぐだだ・・・（泣）

もう少し展開を早くしたいなあ。

次は誰が出てくることやら。

第1章 夢・幻・想（前書き）

。 ついさつき、あらずじと内容が合ってなさすぎる事に気付いた・・・

いつか、人知れず直しておきます。

私は一体何処で道を踏み外したんだか。

・・・でもやっぱり、ゆっくり内容を修正していくか、あらずじを
変えるかは考えることにします。

何かすいませんm（――）m

第1章 夢・幻・想

「ねえ」

「？」

顔を上げると、不機嫌そうにこっちをのぞいてくる顔が目の前にあつた。

目の前である。

「・・・近い」

下手に神経を刺激しないようにおそるおそる言った―が。

あたりに鈍い音が響いた。

思わず頭をおさえる。

「いてえ・・・。」

どうやら意味なかったようだ。

しかし、毎回思うが、こいつのこの馬鹿力は一体何処からきているんだか。

そんなことはお構いなしに彼女は言う。

「なんで人がせっかく心配してあげてるのにそういうこと言つかなあ？」

まったく、君っていつも空気読めてないよね」

必要以上に責められた。

不服だ。

それに空気が読めないのは俺じゃない。

「まあ、そんなとこが幼なじみの私にとっては・・・。」

彼女も彼女でなんだか自分の世界に入りこんでいるようだ。

こんな日々がずっと続くと思っていた。

ずっと・・・。

目の前に女性がいる。

それは未来の自分が恋をした人。

そして、彼の過去である自分も彼と同じように命をかけて守りたいと思った相手。

想いは伝わると思った。

自分が言葉にすることで。

でも・・・。

結局、今の俺は何のためにあの時間へ・・・。

所詮未来の自分に勝てないことは分かっていたくせに。

もう、思い出したくない。

第1章 夢・幻・想（後書き）

なんだか短編小説みたいになってしまった。

大体、前の話と繋がってなさすぎるし。

・・・これからつなげようっと

第一章 4・ドーパント？椎茸？なにそれ・・・（前書き）

テスト～期末テスト～♪

時間が経つのは早いです。

お久しぶりでございます。

待っていた人も待ってなかった人も読んでください！！（土下座）

第一章 4・ドーパント？椎茸？なにそれ・・・

「お前の名前は桜井侑斗か。で、隣のはデネブ。これはあってるな？」

風都のどこかにある病院。その日当たりの良い部屋に桜井侑斗はいた。

「ああ・・・一つ聞きたいんだが」

「なんだ」

「・・・お前、本当に刑事なのか？」

途端、男の顔がひきつる。

「初対面なのにずいぶんと失礼な奴だな」
悪かったな。

「りゅ、竜君？落ちついて・・・」

「ああ、分かっている所長。俺は刑事だ。嘘ではない。

・・・というか、さっき警察手帳を見せただろ」

「ごめんなさいー。わすれてましたー」

「まあいい。話を元に戻すぞ。

一体お前達は何者だ？特にそっちの黒い方。人間じゃないよな？」

「ドーパントが元に戻れなくなっちゃったの？」

亜樹子がデネブを心配そうにみる。

ところがー

「ドーパント？なんだそりゃ。デネブ、お前なんか知ってるか？」

「いいや。俺は何も知らない」

二人は首をかしげた。困ったのは亜樹子達だ。

「えっ、ドーパントを知らないの？！」

「いや待て、所長。こいつらはわざと知らないふりをしているのか
もしれないぞ。

どう考えたって、目の前にいるこいつはメモリの誤作動でもとの姿
に戻れなくなった人間だ」

「メモリ？」

侑斗は困惑した。いつまでもこんなところでぐずぐずしてられないのに。

早く行かなきゃいけないのに。

「もういい！」

照井は突然叫び、侑斗の胸ぐらを思い切り掴む。

「おい！桜井！お前は一体何者で隣のこいつは何なのか、ちゃんと説明しろ」

「！断る」

「ゆっ、侑斗！？」

その場にいた誰もが驚く。遠くのほうで黙って聞いていたフィリップが口を開く。

「検索を完了した。桜井侑斗、君は風都の住人ではないね。

君は、東京から来たんだろ？」

「・・・」

「言いたくないなら言わなくてもいい。こっちで調べるまでだ。

まあ、いずれ君の力を必要とする時が来るかもしれないからね。

その時に力を貸してくれさえすればいい。

ただ――」

「？」

「君が――いや、君たちが守っているものと、同じものを僕らも守っていることだけは、決して忘れないでくれたまえ」

「・・・」

その場に沈黙が漂う。

「あっ、それと――」

「？」

フィリップは侑斗のほうに身を乗り出しそうな勢いで近づいた。

「あっ、何か嫌な予感が」

亜樹子が呟く。

「桜井侑斗！僕に教えてくれないか？」

「なっ、なにをだよ」

突然の事に戸惑う侑斗と、それに気付いてないし気付く気もない
フィリップ。

フィリップは目を輝かせて言った。

「椎茸というものを!!」

再び沈黙が漂う「もちろんさっきと違う意味で。

亜樹子だけが、

「やっぱり・・・」

と小さく溜め息をついた。

第一章 4・ドーパント？椎茸？なにそれ・・・（後書き）

士「俺は一体何処に行ったんだろうか」

翔太郎「知らねえよ。俺こそ何処いったんだよ。

というか、フィリップに会いたくねえ・・・」
士「どんまい」

第一章 5・戦闘・逃走・迷走（前書き）

今回は量が多いですがどうかご勘弁を！！（土下座）

つまんなかったらごめんなさい。

第一章 5・戦闘・逃走・迷走

「困ったな……。俺としたことが、道に迷っちゃったようだ」
左翔太郎は誰にともなくつぶやく。

「さて……。ここはどこだ？」

「どうやら風都タワーの近くのようなだが……」

翔太郎はタワーのほうを見る。

「あれ？なんか変だぞ……？」

風都タワーがいつもより変だった。

もっとも、それはあくまで半熟卵の勘に過ぎないのだが。
ハーフボイルド

翔太郎は帽子をかぶりなおす。

「まあ、ついでだし。——ちよっくらよつてくとするか」

目の前の巨大な鉄骨の山の方へ、ハードボイルダーを走らせた。

「やあ、土……。どうしたんだい？」

なんか物凄く怒っているようだけど」

まったく空気の読めていない海東であった。

土はそのことに対して微塵の疑いも持たずに彼を睨み付ける。どうやら海東から話をきりだすのを待っているようだ。

しかし海東は海東でそのことにまったく気付いていないようだ。
・・。

二人とも、頑固なんですね……。

やっと追いついた夏美が心の中でつぶやく。

「海東、俺のバックルとかもろもろ返せ。今すぐにだ」

海東は訝しげな顔をしていった。

「なんのことだい？」

「とぼけるな！お前が持っていることは分かっているんだ。大体、さっきまで見せびらかしていたじゃないか！！」

「？僕は朝から一回も写真館あそこへは戻っていないよ」

夏美は首をかしげる。

「嘘を言うな海東！」

「嘘なんて言っていないさ。今日の土はなんかおかしいよ。さっさと帰って寝るといい」

海東は手を振って去っていきこうとした――が。

夏美が行く手をふさぐ。

「なんのつもりだい？夏メロン」

「夏ミカンです！！海東さん、土君に早く返してください。」

あれがないと土君、モンスターとかと、戦えないんですよ！」

「それぐらいわかっているさ」

「じゃあ・・・」

「なんで僕が土のものを盗る必要がある？僕にはこれがあるというのに」

そういつて海東は、ポケットからディエンドライバーをだす。

「同じものは二つもいらぬ。確かに土のもお宝としては十分価値はあるけれど、これには負けるからね」

「・・・」

夏美は黙ってしまう。

「じゃあ、僕は行くよ。他に行くところがあるんでね」

海東は不敵な笑みを残して去ろうとしたが、立ち止まる。

「・・・」

あたりを沈黙が支配する。

海東はディエンドライバーをくるくる回している。

「？」

夏美も士も海東の後ろ姿をみつめる。

「！」

海東は突然振り向きディエンドライバーを構えた。

照準を合わせる。標的は――士。

「俺を殺すつもりか？海東」

「君があれを持っていないのなら仕方がない。僕はここで君を助けてから行くことにするよ。感謝したまえ」

「はあ?!」

海東は撃った。弾ははまっすぐ土のもとへ飛んでくる――と思いきや、すれすれの所で土を通り過ぎ、後ろにいたモノへとあたる。

モノは鈍いうめき声を上げて倒れる。土は慌てて振り返り、モノの正体を見る。

「これは・・・イマジン?!何でこの世界に」

「この世界は何故か融合を始めている。・・・まあ、理由なんて僕には興味ないんだけどね」

【KAMEN RIDE】

「変身」

【DIEND】

海東はシアンと黒の戦士へと姿を変えた。

「どうやらここら辺のようだが・・・ん?あれは・・・ディケイド?」

翔太郎は風都タワーの屋上のような所に来ていた。

ここは以前仮面ライダーエターナルと戦ったところでもある。

「何でこんな所に・・・ん?あの怪物は、確か・・・」

翔太郎は暫し考える。そして、思い出した。

「照井の言ってた奴らだな。たしかドーパントではないが、人間でもないって言う・・・。分かなさすぎて、どうしようもないとか

言つてたな」

翔太郎はドライバーを取りだす。

「^{あいつ}デイクイドがいるならなんか対処の仕方を教えてくれるかしんねえな。それに、人手は多いにこしたことはねえ。加勢するとするか」

翔太郎はドライバーを装着した。

「フィリップ、変身だ・・・あれ？」

反応がない。

「おい、フィリップ」

「・・・」

返事がない。

「・・・フィリップ？」

「やあ、翔太郎♪」

いきなり返事が返ってきたので翔太郎は驚く。

「なんかあつたのか？」

「君は知っているかい？」

うわっ、何か嫌な予感。

「この“椎茸”という食べ物を！！」

「・・・」

翔太郎の思考、停止。

「この見た目の悪さの割に栄養満点！！桜井侑斗、君はこれを毛嫌いするなんてもつたない。さあ、食べるんだ！！」

「・・・」

何でこんなにもタイミングがよいのだろうか。

「で、翔太郎。僕になんかようかい？」

あっ、そうだった。

「またでたぜ、ドーパントではないが、人間ではないなにか」

「ああ、それなら既に検索を終えている。それは、イマジンという怪物だ。もう興味もないーうわっ！」

「？イマジン？そう言う名前なのか、あれは」

「痛い痛い……。落ち着きたまえ。僕はこれでもか弱いんだー痛
っ」

なんかスリッパの音が聞こえたような気がした。
「とにかく。イマジンという怪物は、人間ではないがドーパントの
ように人間になるモノでもないようだ。まあ、人間の望みを叶える
ことを生業としているようだけれど。

メモリブレイクで倒せるかどうかはまだ調べてないけれど、追い
払うことぐらいは可能だと思う」

「分かった」

「じゃあ、僕は調べ物に戻ることにするよ」

「……。はあ？」

おい、今何だったこの検索馬鹿は。

「フィリップ、今日の前にそのイマジンとやらがいるんだが」

「ああそうかい。興味ないね」

はあ？！

「興味あるないの問題じゃないだろ？」

「椎茸のほうが大事だ」

「椎茸よりイマジンを倒す方が先だ」

「たまには妥協したまえ」

「できるか！！俺はこの町を泣かせる奴はだいつ嫌いなんだ！！大
体お前はここ二週間……」

「分かった分かった。説教なら後で聞く。とりあえず変身すればい
いんだろっ？」

「ああ」

「もう、仕方ないな……。
仕方ないって何だよ。

【Cyclone】

「変身」

フィリップはやっとメモリをさしたようだ……。

「よし、いくぜ」

【Joker】

「変身」

ぐに。

「・・・ぐに？」

フィリップのメモリをおしたはずなのに何かまったく違う感触が・

翔太郎は恐る恐るドライバーのほうを見て、

「なんじゃこりゃあ!!」

翔太郎は力の限り叫ぶ。

「おいフィリップ!!」

「なんだい翔太郎・・・。早く変身したまえ」

「できるかなもん!! 大体お前がメモリじゃなくて椎茸をさすからいけないんだろうが!!」

「えっ? あっ・・・すまない翔太郎。どうやら間違えたようだ」

「・・・もういや」

翔太郎はドライバーを外してその場に座りこむ。

「はあ・・・」

最近ずっとこの調子だ。一昨日まで何か違うことについて検索していたと思ったら、今度は椎茸かよ。

「あとであいつに椎茸を教えた奴、覚悟しとけよ・・・ふふふ」

不敵な笑みを浮かべる左翔太郎であった・・・。

「! 危ない!!」

誰かが翔太郎に声をかける。

「?」

翔太郎の知らない声だったがそれはともかく。翔太郎は上を見上げる。

「げっ」

目の前に鉄骨がせまってきていた。

「!」

翔太郎は動けない。

やべえ、このままじゃ俺、死んじゃう・・・。

翔太郎は思わず目をつぶった。

「カランカラン・・・。」

「？」

翔太郎は恐る恐る目をあける。

「あれ、俺・・・。」

傷一つついていなかった。ただ埃で服が汚れたただけだった。

「大丈夫・・・かい？」

弱々しい声が聞こえる。声のした方を見ると、水色と黒の人がいた。

デイクイドと見た目が似ているから、おそらく仮面ライダーなのだろうが・・・。

水色と黒の人はカードを切る時のような音をたてたかと思ったら、人間の姿になる。

「おい！大丈夫か？」

翔太郎は男のもとへと駆け寄る。

「よもやこんなところで強制解除されるとはね・・・。」

男は誰にともなく呟いた。

「強制解除？」

「ん？・・・ああ君か。怪我はないかい？」

「俺のことよりも自分の心配をしるよ。」

「僕は君の心配なんてしていないさ。」

「はあ？」

「君の持っているお宝のほうさ。」

男はドライバーをみつめる。

「あつ、あれなら問題ないぜ。結構丈夫なんでね。」

「そうか・・・。」

男は立ち上がる。翔太郎は慌てて男の体を支える。

男の視界の先にはデイクイドがいた。

「海東・・・。」

「言つとくけど僕は仲間のお宝を盗んだりなんかしない」

「どうだかな。お前は嘘と盗みは十八番だろ？それに俺はお前のことと仲間だとは思っていない」

「そうかい。まあ、僕には関係のないことだ。これ以上君が怒ろうと僕には関係ないのと同じようにね」

「言ってることが支離滅裂になつてゐるぜ、あんた」

「黙っていたまえ」

【K A M E N R I D E D I E N D】

「僕はもう仲間でない君達に付き合っているほど暇じゃないんでね」

【A T T A C K R I D E】

「失礼させてもらつよ」

【I N V I S I B L E】

男―海東大樹は姿をけした。

ディケイドは変身を解除する。

「士さん!!」

夏美は士の所へ駆け寄る。

士は黙つて拳を柱に打ちつける。

「・・・海東!!」

士は声の限り叫んだ。

翔太郎も士の所へ近寄る。

「一体、なにがあつたんだ？」

士は黙っている。士の代わりに夏美が翔太郎に話をした。

「なるほど・・・」

「海東さんがイマジンって言う怪物を倒していたんですけど、数が多すぎて一人じゃ倒し切れないつてなった時、ディケイドライバーが・・・」

「やっぱりあいつが盗んでいたじゃないか!!」

士は怒る。

「・・・」

沈黙があたりを支配する。

「とにかく、俺は海東を探しに行く！」

「あっ、ちょっと土さん！！」

土は一人で走っていつてしまった。夏美は後を追おうとしたが、足を止める。

「？行かないのか？」

「・・・」

夏美は黙っている。

「？」

翔太郎は首をかしげる。

「・・・」

沈黙があたりを支配する。

第一章 5・戦闘・逃走・迷走（後書き）

もうすぐ第一章完結・・・かもしれない。

完全なる見切り発車してますからどうなるか分かりません！！

次の話を楽しみにしていただけると嬉しいです♪

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8558w/>

仮面ライダー 過去とメモリとカード

2011年12月17日12時51分発行